# 気がかりな夢～カフカの変身より

日頃寝　ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気がかりな夢～カフカの変身より

【Ｎコード】
Ｎ０５１３Ｐ

【作者名】
日頃寝　ハル

【あらすじ】
カフカの変身の冒頭。グレゴールザムザがどんな夢を見たのか書いてみました。

## （前書き）

カフカの「変身」のフィクションです。
ザムザが見た「気がかりな夢」を書きました。
原作が大好きな人、自分が思った「気がかりな夢」を壊さないでいて欲しいと思った方は、見ないほうがよろしいかもしれません。
本当はそんな人に読んでもらって、「変身」の感想を言い合えたらいいな、と思うのですが。（私も原作が好きなので）

グレゴール・ザムザはある気がかりな夢を見た。
夢の中でザムザは毒虫になった母父妹を養っていた。
父はでっぷりと太った毒虫だった。ほとんど肘掛け椅子から動かなかった。
やせ細った母は父の横に寄り添って、父が椅子からずり落ちそうになる度に自らクッションになって元の位置に戻るのを助けていた。
妹はいつも壁や天井を這いずり回ってじっとしていることがなかった。

僕はセールスマンの仕事をして、彼等を養っている。
彼等はただ食べて、寝て、身体をよじり、そこかしこを這う。しかし彼等は人間だった。
僕は知っている。
彼等は人の意思を失ってはいないことを。
僕は知っている。
僕が彼等を人間らしく振舞うことで、彼等が本当の毒虫にならないことを。

僕は仕事を終えて家に帰った。
父は肘掛け椅子の上に伸びている。
仰向けになった腹には小さく細い頼りなさげな足がぎっしりと生え、てんで勝手に動き回っている。
母はその横で心配そうに父を見上げ、自分は編み物をしようと思ったのか、毛糸を転がしている。
しかし鈎針を掴むことが出来ないため（なんていったって母の足には指がないのだから！）毛糸はどんどん伸びる一方だ。
僕は毛糸の玉を巻き直し、母の前にそっと置いた。

母は目の前に置かれた毛糸を不思議そうに眺め、僕に頭を下げた。
僕は伸びっぱなしの父の額にキスをした。
父は僕にハグしてくれようと身を捩ったが、残念ながら手の長さが足りなかった。
僕は父の肩に見当をつけてたたき、妹の部屋に向った。

妹の部屋をノックした。
こうしないと妹はいつもこちらに向って頭をまっすぐに突き出して、突進してくる。
妹はやはり女の子で、僕が勝手に部屋に入ると怒るのだ。
しかし妹は返事をしない。いつものことだ。
毒虫になった彼等には人に聞こえるほどの声が出せないのだ。
僕は一応、「入るぞ」と声を掛けて部屋に入った。
妹の部屋は妹が這いずり回った跡の粘液で壁や天井中が汚れていた。
僕は何か変な臭いに頭が痛くなったが、ネクタイを緩め部屋を掃除した。
僕が部屋中を雑巾で磨いているとき、妹は申し訳なさそうに椅子の下で縮こまっている。
僕は妹に「大丈夫さ。だけど気にするならせめて床を歩いてくれないか、おてんばさん」と言った。
僕は綺麗になった部屋を出て、彼等の食事を取りに行った。

長い夢だった。
夢の中でザムザはこれは奇妙な夢だと自覚していた。
夢の中でザムザは毒虫になった彼等と生活しているのに疑問を抱かなかった。
夢はまだ続く。

夢の中であるとき僕は仕事で海外に出張に行った。
たったの一泊だけだったが僕は彼等のことがとても心配だった。
そう言えば夢の中ではお手伝いさんがいなかった。
僕はたくさんの食料を彼等のために用意し、窓を少しだけ開け、大人しくしているように妹に言い、行ってきますと家族にキスをした。

仕事から帰ってくると家中メチャクチャだった。
壁という壁は彼等が通ったため粘液に覆われ、たった一晩家を空けただけなのに、埃が床に舞い、冷蔵庫は荒らされ、食器や電球が割れていた。
僕はとてつもなく、怒った。
三匹の毒虫をひっ捕まえ、一つの部屋に押入れ（唯一害のなかった僕の部屋だ）鍵を掛けた。
そして僕は家中を片付け始めた。
僕の部屋からは、ずっずっと這いずっている音が聞こえる。
何故だか僕はその音が怖かった。
僕は何で僕の部屋に彼等を閉じ込めてしまったのかと後悔した。
僕の部屋まで荒らされてはたまらないと思った。
僕は震えながら部屋を綺麗にし、彼等を僕の部屋から出した。

いつものように肘掛椅子に伸びている父におやすみのキスをした。
それでも父は椅子の上で小さくて細い足をバタバタと動かすだけだった。
母が突っついている毛糸を巻き直し、棚に戻した。
母は頭を上げ下げし、何か遊び道具を取られたことを怒っているようにも見えた。
妹の部屋に入ると妹は慌てたように椅子の下に飛び込んだ。
怯えているようにも見えた。

僕は僕の部屋があまり汚されていないことを不思議に感じた。

奴等は毒虫で、そこらじゅうを這いずりまわり、食べ、寝て、それだけの生き物なのに。
僕の部屋は居心地が悪かったのか。
僕の部屋の中では随分大人しくしてくれたものだ。
僕は満足して、ベットに寝転んだ。
もちろん鍵を掛けることを忘れなかった。
明日は7時に電車に乗りたいから、6時には起きなくちゃ。
嗚呼、奴等の所為で今日もあまり寝る時間がないぞ。
僕はそう思いながら深い眠りに着いた。

ザムザは夢と現実の狭間で（夢から覚める直前と言った方が正しいか）、彼等が果たして人なのかと思っていた。
見た目は毒虫だ。
節目のある身体は硬い殻で覆われ、柔らかい腹には細く小さい足がわらわらと生えている。
人の大きさの虫は何も映さない小さい目で、僕に何を訴えていたのだろう。
果たして彼等は毒虫だったのだろうか。
突然毒虫になってしまった彼等はどのようにして、その事実を受け入れたのだろう。

僕が彼等を人間らしく扱えば、彼等は本当の毒虫にならずに済んだのではないか。

いいや。彼等はきっと最後まで人間だったのだ。
僕がそれを認めようとしないだけで、彼等は人の心を持っていたのだ。

グレゴールザムザはある気がかりな夢を見て目が覚めた。
その夢がどんな夢だったかは忘れてしまった。
ザムザは久々に深く眠った気がして、重い頭を持ち上げた。
見えたのは節のある軟らかそうな腹と、たくさんの小さい足がバラバラに動く自分の姿だった。

ザムザは毒虫になっていた。

## （後書き）

読んでくださってありがとうございます。

私はカフカの「変身」が好きです。
たくさん考えさせられるからです。
「変身」を読んでこの話を読んだ方、ぜひ感想を聞きたいです。
よろしくお願いします。

「変身」を読んでいない方、もし私のお話を読んで読みたくなってくれたらとってもうれしいです。

ありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0513p/

気がかりな夢〜カフカの変身より

2010年11月21日19時56分発行